

# 特別記事

## 追悼——ネッロ・サンティ

イタリア・オペラの最後の巨匠、ネッロ・サンティが2月6日、チューリヒで亡くなった。88歳米寿で世を去った彼は、「オペラの巨匠」を絵に描いたような指揮者だった。1993年から1999年まで読売日本交響楽団に、2001年からNHK交響楽団にたびたび客演、日本でもすっかりおなじみのマエストロだった。

### 生きること＝音楽だった最後の巨匠

文＝中東生  
Text＝Shinobu Nakai

#### 作曲家の理解のため作曲科へ

ネッロ・サンティは「音楽を愛していた」というよりも、生きること＝音楽だった。父親が趣味で集めていたクラシック音楽のレコードを聴いて育ち、4歳のころ、アドリアに来たヴェルディ《リゴレット》の巡業公演を観て、指揮者を志す。このときから「偉大な作曲家の意図を、最高の状態で再現する」ことが人生の目的となった。それを邪魔する事柄に対して立ち向かう姿勢は、幼少時からすでに育まれていたようだ。「小学生のころ、ラジオのオペラ全曲放送に間に合うように、数分だけ早く家に帰してくれと先生に懇願したのに却下されたので、ドアをバツと閉めて帰ってやった」と武勇伝を語っていた。彼にとつてラジオやレコードこそが真の学校だったのだろう。

彼が敬意を抱く作曲家たちの意図を理解するため、指揮科ではなく、パドヴァ音楽院の作曲科で学んだ。そして20歳のときに、念願のヴェルディ《リゴレット》で指揮者デビューをはたす。その後はイ

タリア国内外で振り、リハーサル時にオーケストラのなかで欠席者がいると、その楽器を代わりに弾いていたため、「何でも弾けるマエストロ」が育った。

1956年にリヨンでブッチーニ《蝶々夫人》を振ったときの主役、ミキコ・イワイさんがチューリヒ歌劇場でも蝶々さんを歌った際に、サンティをも蝶々さんを歌った際に、サンティをヴェルディ《運命の力》に推薦したため、1958年チューリヒにデビューし、地位を確立した。やがてチューリヒ歌劇場専属のパレリーナと恋に落ち、チューリヒに居を構える。いつもいっしょに行動していた愛妻と3人の子供、末には4人の孫に恵まれ、家族を愛したが、彼の頭の中にはまず音楽があった。

「音楽はぜいたくだ。生死にかかわるものではない。だからこそ、一流の音楽を提供しなければ、それはただのむだになる」と、世界中のどこへ演奏旅行に出ても、観光することはほとんどなく、譜面を読み込んだ。写真記憶力があり、すべて暗譜で振ることも有名だったが、それは持つて生まれた記憶力だけで成せる



サンティが日本最後の演奏となったのは、2014年11月26日、NHKホールで行われたN響B定期でのメンデルスゾーン「交響曲第4番（イタリア）」だ。©NHK交響楽団

技ではなく、常に音楽のことを考え、リハーサルに向けて夜も起きて勉強する毎日があったから可能だったのだ。

#### 音楽のためには妥協なし

最高レヴェルの音楽へ到達するために挑む小学生のころの姿勢は、指揮者になっても変わらなかった。楽団員や歌手のミスも、怠慢から発生したものだとか断すると容赦ない。公演中に携帯電話が鳴ったときも、音楽を止めて短く鋭くしためた。有名でも自分の声ばかり聴か

## The Memorial of Nello Santi

せたがる歌手との共演は避け、無名でも自分の考える音楽を再現してくれる音楽家を推した。音楽性がない歌手も成功に導き、立派な声を持たない歌手でも、オーケストラを寄り添わせ、自分の音楽を織り上げた。自分の娘ばかり使いたがるという陰口もあるが、「自分の音楽を表現してくれる歌手がいるのに、目の前の歌手が自分の棒のように歌ってくれないと健康に悪いから」と、ミラノ・スカラ座など、いくつもの歌劇場で、キャストインクのために出演を辞した。そのような姿勢は音楽界で「出世」していく妨げになるためにマネジメントもむずかしく、最後は息子がマネジヤーを務めた。それらは身内びいきではなく、彼の音楽を実現する手段だったのだ。

NHK交響楽団との本番前の会場リハーサルで、対向配置を望んだのに叶えられなかったため、キングコングのような巨体で譜面台や楽器を動かし始めてみなを驚愕させたが、その晩の成功により、次の共演からは対向配置が恒例となった。ハンブルク州立歌劇場でも、舞台上に全裸のモデルが出る演出の際、リハーサル中に楽団員たちが裸を視界に入れようとして集中しないので、ピットの端に立たせて目の保養をさせてから稽古を再開したという(一)。読み替え演出で作品を壊す演出家も避けた。以前、「ノーカット版の演出なのに、カットを施して残念だった」という批評があったが、「キャストの力量が不十分なのにノーカット版にこだわるのは音楽に失礼」と

いう当然の決断だったのだ。

前述のイワイさんなどのこともあったのか、音楽的な義理も通した。どの歌劇場から来日公演を振るオファーが来ても、「初来日はアレーナ・デイ・ヴェローナのおかげだったが、日本の一流オーケストラに客演する立場になつたままでは、いかなる歌劇場とも来日するべきではない」と断っていた。そんな部分が日本と呼応するのか、日本の礼を尊ぶ食文化や伝統、そして日本人に敬愛を抱いていた。

### 歳祝賀コンサートも計画

「指揮は人に教えられるものではない」という考えで、指揮科の教授やマスタークラス等を引き受けなかったが、才能

のある若手がリハーサルを見学することは援助した。彼は音楽伝統継承の危機を憂いていたのだ。彼の最後の指揮は、2019年3月19日、チューリヒ歌劇場でのドニゼッティ《ランメルモールのルチア》だったが、私たちはどのようにその伝統を受け継いでいけるだろうか。

90歳祝賀コンサートの企画も始まっていた矢先の「老衰」「大往生」といえる突然の死は、「指揮台で死にたい」と望んでいたサンティを、盟友だったカルロ・ベルゴンツィが、レナータ・テバルデイ、アルド・プロツティ、ボナルド・ジヤイオッティのキャストでヴェルディ・オペラを上演するために、天国へ呼んだからかもしれない。

### 教会を埋めつくした参列者、サンティの葬儀

ネッロ・サンティの葬儀が、故人が敬意を抱いていたロッシーニの228歳の誕生日である2月29日、チューリヒのエルローザー教会で行われた。新型コロナウイルスの流行のため、出身地であるアドリア市長をはじめ、レオ・ヌッチャルツェーロ・ライモンディらが、イタリアから出られず参列できなかったが、それでも教会を埋めつくした参列者を、チューリヒ歌劇場の首席奏者たちによる室内楽が包み込み、すべてを見透かしているような視線が在りし日のマエストロを鮮明に思い出させる写真が、様子を見守っているようだった。45年間友情を育んだ神父がドイツから駆け付け、70歳記念に本を出版した音楽学者のマティアス・フォン・オレリッがサンティの人生と音楽観を語った。「音楽にいちばん大切なのはスタイルを守ること。あとはそのときの偶然に左右されるもの」と言った言葉や、ドニゼッティ《愛の妙薬》のレチタティーヴォをピアノで伴奏した際、アディーナがトリスタンの物語を読む場面で、

ワーグナー《トリスタンとイゾルデ》を弾いたとか、懐かしいエピソードに微笑や涙を誘った。アドリア市立歌劇場にサンティの名を冠するというニュースが舞い込んだ。小さな街だが、サンティ・スタイルのメッカを目指してほしい。

(中 東生)



故人の写真が飾られた祭壇  
©中東生



チエチーリア・バルトリ (メゾソプラノ歌手)  
Cecilia Bartoli, Mezzo Soprano



© Decca / Uli Weber

1997年から共演する機会に恵まれた指揮者ネッロ・サンティは、音楽家のなかの音楽家でした。彼は伝統への深い理解とライヴ上演に対する確かな直感を持っていましたので、彼の指揮するすべてのオペラの夕べは、キャストにとっても観客にとっても、みなにとって特別なお祝いのような舞台になるのです。チューリヒ、そして地球中のオペラ界は彼の喪失感を抱き続けるでしょう。

ピョートル・ベチャワ (テノール歌手)  
Piotr Beczala, Tenor

マエストロ・サンティと過ごしたすべての時間は、リハーサルであろうと本番であろうと、感動と集中力に包まれていました。マエストロは親切で、彼の音楽的、ときには声楽的指示に、唯一100パーセント信用してついていける指揮者でした。その指示に従うだけで、私は最高の音楽的表現に集中できたのです！彼からテノールとして認められることは私にとって大きな励みになり、それに加えて抜群に親切な人でした。私がチューリヒ歌劇場のヴェルディ《リゴレット》第2幕の前に、玉座に座って幕開けを待っている間、彼は私の前を通りながらいつも冗談を準備してくれたので、彼は指揮台に着くまで私は身をよじって笑っていたものです。ベルゲンでロッシーニ《スターバト・マリエル》を歌ったとき、彼は私にラダメスの主要部分



ありし日のサンティ (左) と

を歌いながら、私の声に合っていると勧められました。そうしていまヴェルディ《アイダ》の準備をしているので、あの夕べのことをよく思い出します。マエストロ・サンティの棒で《アイダ》を歌う夢はもう叶うことはありませんが、思い出は永遠に残るでしょう。マエストロ、ありがとう。

テオドール・クルレンツィス (指揮者)  
Theodor Currentzis, Conductor

マエストロ・サンティが逝ってしまったと聞いて、とても悲しいです。なぜならば、彼と共に、20世紀も逝ってしまうからです。彼は20世紀最後の巨匠でした。これまでの音楽界の歴史を体現していた存在でした。僕は彼の公演をチューリヒで聴いて、握手して、少しお話しできただけでいいです。残念です。本当に残念です。



© 中東生

プラシド・ドミンゴ (テノール/バリトン歌手・指揮者)  
Plácido Domingo, Tenor/Bartone and Conductor

マエストロ・サンティと私は、どれだけ録音と公演を共にしましたか。初めてのアリア集レコード録音も指揮してくれました。ハンブルク州立歌劇場では私のドイツ・デビューとなったブッチーニ《トスカ》以来、同《ボエーム》など多数共演しました。公演後には宿泊していたホテルのバーで、彼がピアノを弾き、私が歌って過ごしたりしました。私の子供たちもいっしょに遊んで大きくなりました。アレナ・ディ・ヴェローナでのデビューでブッチーニ《マノン・レスコー》のデ・グリュエを歌ったときも彼の指揮でした。そしてミラノ・スカラ座



© Brescia e Amisano

でも、思い出がたくさんです。彼は古くからの伝統的な歌いかたを、往年の歌手たちのレコードからすっかり研究しつくして、声の色やフレージング、ブレスの場所まで知っていました。まるで百科事典のようなそれらの知識から、歌手たちにとって参考になるポイントを教えてくれるのです。彼の才能、たくさんの稽古、ジョーク、暗譜で振る音楽の天才！喜びと音楽性にみちあふれたキャリアに、最後の温かい拍手を贈ります。

エディタ・グルベロヴァ (ソプラノ歌手)  
Edita Gruberová, Soprano

また一人、巨匠が逝ってしまいました。彼とは1980年代に初めてドニゼッティ《ランメルモールのルチア》でこいっしょして、すべて暗譜で指揮する姿に驚いたことを覚えていて、通常カットされる部分も演奏するために、歌って教えることができました。そのほかウィーンで共演したとき、「ネッロ」と呼び

かけたら、「え、だれ？ 僕？」とおどけてキョロキョロしていたのが印象に残っています。リハーサルのすばらしさも記憶に残っていますが、敬しい人でもあり



ました。チューリヒではロッシーニ《セミラミデ》で、私の歌ったカデンツァがお気にめさず、変えさせられたことがあります。確固たる自分の理想を持った音楽界の識者でした。なぜだか彼は不死身のような気がして、もういないということが信じられませんが、いまでも目の前にはっきりと彼の姿が見える気がします。彼は音楽史に刻まれる功績を残したので、それはずっと生き続けていくでしょう。

トーマス・ハンブソン (バリトン歌手)  
Thomas Hampson, Baritone

私が初めてマエストロ・サンティと一緒に働いたのは1980年代後半のメトロポリタン歌劇場で、彼は当歌劇場の主要なイタリアン・レパートリーの公演を担っていました。彼の驚異的な音楽的記憶力と完全な理解力、歌手たちへの稽古は、まさに圧倒的の評判を得てました。私がチューリヒでマエ

篠崎史紀 (NHK交響楽団第1コンサートマスター)  
Fuminori Shinozaki, First concertmaster of NHK Symphony Orchestra

篠崎史紀 (M.A.R.O.) はネッロ・サンティと何度も共演し、「その演奏は神がかっていた」と語る。「初めてマエストロの演奏に触れたのは1981年ごろのウィーン。イタリア・オペラの巨匠で、すごく怖い感じがしました。その後、読売日本交響楽団で実際に共演することができ、まずヴェルディ《ファルスタフ》を演奏したのですが、これがまさに神がかった指揮で、スコアの隅々まですべて頭に入っている。リハーサルのときは、スコアは一切見ない。オーケストラの各楽器のフィンガリングも歌手のパートもすべて暗譜し、うたってしまう。まるで自分が書いた作品のように自然で、職人というか天才肌でしたね。」その後、NHK交響楽団でも共演が可能になった。「イタリア・オペラからブラームス、ストラヴィンスキーまでさまざまな曲を演奏しました。マエストロは古いものを大切に、写譜して使い込んだ楽譜、ぜんまい仕掛けのメトロノームなど、愛着をもって使っていました。」



指揮台を降りると陽気で楽しい性格だった。「典型的なイタリア人気質で、明るく楽しく、オペラの話はたくさんしてくれました。みんなに愛される性格でしたね。一つひとつの演奏が貴重な財産になっています。あこがれの指揮者でしたし、学ぶことは多かったです。」(まとも=伊熊よし子)

# ネッロ・サンティを偲ぶ

まとも=中東生  
Text=Shinobu Naka

ネッロ・サンティ Nello Santi

- 1931年9月22日 イタリア・ヴェネト州のアドリアで、日用品・食料品店を経営するクラシック音楽愛好家の家に生まれる。
- 1934年 ヴェルディ《リゴレット》を観て、指揮者を志す
- 1951年 12月19日 バドヴァのヴェルディ歌劇場に、志のきっかけとなった《リゴレット》で指揮者デビュー
- 1953年 ベニャミーノ・ジエリのコンサートを指揮、1956年にはスペインツアーに同行する
- 1958年 チューリヒ歌劇場に《運命の力》(ドイツ語版)でデビュー。その後60年以上にわたり、8人の総裁と90以上のプロダクションを創り上げることになる
- 1960年 ウィーン国立歌劇場にヴェルディ《アイダ》でデビュー後、当歌劇場では17演目79公演を指揮した。同年、ヘルベルト・フョーン・カラヤンに招かれて、ザルツブルク音楽祭にもデビューする
- 1962年 ニューヨークのメトロポリタン歌劇場にデビューする。以後40年間で30シーズン客演した
- 1970年 アレーナ・ディ・ヴェローナにブッチーニ《マノン・レスコー》でデビューする。マノンはマグダ・オリヴェーロ、デ・グリュエはプラシド・ドミンゴ
- 1971年 ミラノ・スカラ座にブッチーニ《蝶々夫人》でデビューする
- 1974年 パリ・オペラ座にヴェルディ《シチリア島の夕べの祈り》でデビュー
- 1986年 この年から10年間スイスのパーゼル放送交響楽団首席指揮者を務める
- 1989年 アレーナ・ディ・ヴェローナ来日公演、ヴェルディ《アイダ》で初来日
- 1990年 ローマ歌劇場来日公演、ブッチーニ《トゥーランドット》で再来日後、1993年から読売日本交響楽団に、2001年からはNHK交響楽団に定期的に客演
- 2020年2月6日 チューリヒにて死去

前述の歌劇場のほか、コヴェント・ガーデン王立歌劇場、サンフランシスコ歌劇場、ハンブルク州立歌劇場、バイエルン州立歌劇場、コロソ劇場、リセウ歌劇場、フェニーチェ歌劇場、ケルン歌劇場、ケルン・ギルツェニツヒ管弦楽団、オランダ管弦楽団、オスロ・フィルハーモニー管弦楽団、ニース歌劇場、マルセイユ歌劇場、リサボン歌劇場などにも定期的に出演した。イタリア共和国から、カヴァリエーレ、グランデ・ウッフィチャーレ両厚労勲章を、スイスではHans-Georg-Nägeliメダル、STAB賞、チューリヒ市文化賞を授与されている。

トロ・サンティに会った時、彼はアレクサンダー・ペレイラ総裁時代のイタリアン・レパートリーを固めており、歌手たちはみな、彼から指導を受けること、共演できるように認められる幸運を得たいと願っていたものです。そしてついに彼とヴェルディ《エルナーニ》を歌うオファーを得たとき、私は榮幸と共に、恐れも抱いていました。でも、リハーサルの日目から千秋楽まで、彼は歌手たちへの理解と挑戦を模範的に示してくれました。彼のジョークと武勇伝は緊張をほぐしてくれ、パフォーマンズの質の向上のために学ぶことがたくさんありました。偉大なマエストロはすべてのリハーサルと公演を暗譜で指揮していました。そして、全総譜のすべての瞬間を把握し、歌手全員の歌のみならず、オーケストラのすべての楽器に対しても、必要なときは言葉や歌でキューを出すのです。並外れています！「ネッロ・ザ・グレイト」と誰かが名づけたように、彼は音楽家のなかの音楽家であり、他の追従を許さない、歌手のための指揮者で、偉大な劇場人であり、全世界のために貢献した人でした。私は《エルナーニ》、ブッチーニ《トスカ》、ヴェルディ《シモン・ボッカネグラ》を彼から学び、消化し、共演できたことを心から感謝しています。そして、もともと感謝しているのは、この特別な音楽観がどのように得られるのかという秘訣を、少しでもかいま見ることができたことです。彼はそのたくいまれな才能を寛大に分け与え、音楽と劇場の魔法を創造することができた人でした。

「真の感動」がないのです！彼の死と共に、私の世界も終わりました。全部やり切った満足感と共に、救済所の公演を除いて、すべてキャンセルしました。1981年に初めてミラノ・スカラ座と行った日本には特



サンティ(右)とともにカーテンコール

別に行こうと思っていますが、サンティの死と共に私も引退します。アレクサンダー・ペレイラ(チューリヒ歌劇場前総裁/任期1996-2012) Alexander Pereira, Previous director of Opernhaus Zürich

20年以上もマエストロ・サンティと、毎年一つ以上の新演出を世に送り出せたのは、私にとっても、そしてチューリヒ歌劇場にとっても幸運な出来事でした。彼は歴代の指揮者たちがどんなテンポで指揮し、歴代の歌手たちがどんなフレーズで歌ったかなど、イタリアン・レパートリーについて、すべてのデータや頭の中にインプットしていました。もちろんすべての音符も記憶されています。あるリハーサルで、楽団員たちがふざけて試みに「小節番号〇〇番はシですか、ドですか？」と聞いたところ、怒った顔で即座に「ふざけるな！そこはラだ」と答えたのです！そんな膨大な知識を若い歌手たちに教えてくれたことは、音楽界に対する多大な貢献として残っていくでしょう。彼は伝統の最後の伝道者だったのです。

ローランド・ビリアゾン(テノール歌手) Rolando Villazon, Tenor

巨匠が一人去った。僕たちのドニゼッティ《愛の妙薬》の記憶は、僕のキャリアのなかでもっともすばらしい公演の一つとして、僕の心のなかに永遠に刻まれるだろう。

ハンナ・ヴァインマイスター(ライルハーモニア・チューリヒ第1コンサートマスター) Hanna Weimmeister, First concertmaster of Philharmonia Zürich

ちょうどいま、2月29日のマエストロ・サンティの葬儀で弾く四重奏の練習が終わったところです。マエストロの特別な人柄とインスピレーションを与えてくれるリハーサルを、20年間も享受できた感謝を込めて、シューマン《ソネツ》「クラリネット五重奏曲《夕べの歌》」と、ヴェルディ《莪四重奏曲》、ブッチーニ《莪四重奏曲《菊》》、ロッシニ《莪四重奏曲》を選びました。マエストロはすごい耳を持っていて、小さなミスでも気づき、次にその場所を弾くと、ニヤツとこちらを見たりします(笑)。彼は一部分を極端に詰めて練習するので、別の部分まで極める時間が残らないのですが、「こんな高いレベルを求められているのか」と認識することで、練習できなかつた場所も同じレベルに達せなさいいけないと自戒するのです。彼は私たちが別世界・別の時代に連れて行ってくれる気がしました。彼みたいな指揮者にはもう二度と会えないでしょう。



© 中東生

トロ・サンティに会った時、彼はアレクサンダー・ペレイラ総裁時代のイタリアン・レパートリーを固めており、歌手たちはみな、彼から指導を受けること、共演できるように認められる幸運を得たいと願っていたものです。そしてついに彼とヴェルディ《エルナーニ》を歌うオファーを得たとき、私は榮幸と共に、恐れも抱いていました。でも、リハーサルの日目から千秋楽まで、彼は歌手たちへの理解と挑戦を模範的に示してくれました。彼のジョークと武勇伝は緊張をほぐしてくれ、パフォーマンズの質の向上のために学ぶことがたくさんありました。偉大なマエストロはすべてのリハーサルと公演を暗譜で指揮していました。そして、全総譜のすべての瞬間を把握し、歌手全員の歌のみならず、オーケストラのすべての楽器に対しても、必要なときは言葉や歌でキューを出すのです。並外れています！「ネッロ・ザ・グレイト」と誰かが名づけたように、彼は音楽家のなかの音楽家であり、他の追従を許さない、歌手のための指揮者で、偉大な劇場人であり、全世界のために貢献した人でした。私は《エルナーニ》、ブッチーニ《トスカ》、ヴェルディ《シモン・ボッカネグラ》を彼から学び、消化し、共演できたことを心から感謝しています。そして、もともと感謝しているのは、この特別な音楽観がどのように得られるのかという秘訣を、少しでもかいま見ることができたことです。彼はそのたくいまれな才能を寛大に分け与え、音楽と劇場の魔法を創造することができた人でした。



© Jiyang Chen

レオ・ヌッチ(バリトン歌手) Leo Nucci, Baritone

マエストロ・サンティは私がいちばん多く共演した指揮者です。1979年にハンブルク州立歌劇場のヴェルディ《椿姫》でデビューしたとき、そして翌年にチューリヒ歌劇場へヴェルディ《ルイザ・ミラー》でデビューしたときもサンティの指揮でした。メトロポリタン歌劇場(MET)で歌うときは、サンティのアパートを借りるほど家族ぐるみの友情を育み、彼がMETで振らなくなったので、私も2004年の《ルイザ・ミラー》以来、行くのをやめました。それはただの友情ではなく、いっしょに働く楽しさが土台にありました。たくさんのお話を彼から学び、たくさんのお話を聞きました。アレナ・ディ・ヴェローナのヴェルディ《リゴレット》と、ナポリのサン・カルロ歌劇場のヴェルディ《二人のフォスカリ》の録音は、私の宝物です。サンティが逝って、アメリカの友人たちからも悲しみの声がたくさん届きました。「真のオペラの時代が終わってしまった」と。われわれはこれからだれと働けばいいのでしょうか。私たちの時代は声のために歌い、オペラのためのオペラを創りました。いまの時代はすべてビジネスです。「真の感動」がないのです！彼の死と共に、私の世界も終わりました。全部やり切った満足感と共に、救済所の公演を除いて、すべてキャンセルしました。1981年に初めてミラノ・スカラ座と行った日本には特

別に行こうと思っていますが、サンティの死と共に私も引退します。アレクサンダー・ペレイラ(チューリヒ歌劇場前総裁/任期1996-2012) Alexander Pereira, Previous director of Opernhaus Zürich

20年以上もマエストロ・サンティと、毎年一つ以上の新演出を世に送り出せたのは、私にとっても、そしてチューリヒ歌劇場にとっても幸運な出来事でした。彼は歴代の指揮者たちがどんなテンポで指揮し、歴代の歌手たちがどんなフレーズで歌ったかなど、イタリアン・レパートリーについて、すべてのデータや頭の中にインプットしていました。もちろんすべての音符も記憶されています。あるリハーサルで、楽団員たちがふざけて試みに「小節番号〇〇番はシですか、ドですか？」と聞いたところ、怒った顔で即座に「ふざけるな！そこはラだ」と答えたのです！そんな膨大な知識を若い歌手たちに教えてくれたことは、音楽界に対する多大な貢献として残っていくでしょう。彼は伝統の最後の伝道者だったのです。

ローランド・ビリアゾン(テノール歌手) Rolando Villazon, Tenor

巨匠が一人去った。僕たちのドニゼッティ《愛の妙薬》の記憶は、僕のキャリアのなかでもっともすばらしい公演の一つとして、僕の心のなかに永遠に刻まれるだろう。

ハンナ・ヴァインマイスター(ライルハーモニア・チューリヒ第1コンサートマスター) Hanna Weimmeister, First concertmaster of Philharmonia Zürich

ちょうどいま、2月29日のマエストロ・サンティの葬儀で弾く四重奏の練習が終わったところです。マエストロの特別な人柄とインスピレーションを与えてくれるリハーサルを、20年間も享受できた感謝を込めて、シューマン《ソネツ》「クラリネット五重奏曲《夕べの歌》」と、ヴェルディ《莪四重奏曲》、ブッチーニ《莪四重奏曲《菊》》、ロッシニ《莪四重奏曲》を選びました。マエストロはすごい耳を持っていて、小さなミスでも気づき、次にその場所を弾くと、ニヤツとこちらを見たりします(笑)。彼は一部分を極端に詰めて練習するので、別の部分まで極める時間が残らないのですが、「こんな高いレベルを求められているのか」と認識することで、練習できなかつた場所も同じレベルに達せなさいいけないと自戒するのです。彼は私たちが別世界・別の時代に連れて行ってくれる気がしました。彼みたいな指揮者にはもう二度と会えないでしょう。



© 中東生